



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シンポジウム開催主旨
Author(s)	加藤, 博文
Relation	先住民文化遺産とツーリズム : 北海道の可能性(International Symposium: Indigenous Heritage and Tourism - Potential in Hokkaido). 2012年10月13日-14日. 北海道大学学術交流会館小講堂, 札幌市.
Issue Date	2012-10-13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51257
Type	other
File Information	symp_intro.pdf



International symposium 2012 Indigenous Cultural Heritage and Tourism

国際シンポジウム
先住民文化遺産とツーリズム
-北海道の可能性-

シンポジウム開催主旨

加藤 博文

(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)

2012 年 10 月 13 日と 14 日の両日にわたり開催される国際シンポジウムにおいては、北海道における先住民族、その祖先が構築し、後継者社会が育んできた文化遺産の保存と活用に関するさまざまな課題と展望について議論して行きたいと考えています。

北海道大学アイヌ・先住民センターでは、2008 年から 2011 年にかけて、先住民族の文化遺産の活用について、エコツーリズム、アイヌ民族自身によるガイド養成、アイヌ文化に触れるトレイルコースづくりなどにワーキンググループを組織し、取り組んできました。その成果は 2012 年 3 月に報告書としてとりまとめました。その成果は、『先住民文化遺産とツーリズム ～アイヌ民族における文化遺産活用の理論と実践』として刊行し、電子配布版はホームページにおいてもダウンロードできるようにしております。

* * * * *

今回のシンポジウムの構成は、この過去 4 年間の取り組みの成果によっており、特に 2 日目のセッションの報告は、実際に報告書の取りまとめに参加した大学院生を含めた若手研究者と、プロジェクトに参加したアイヌ民族の皆様による報告となっています。

このプロジェクトに取り組む中で見えてきた課題は、いくつもありますが、その中でも私たちが注目した点は、アイヌ民族の祖先が築き、世代を超えてアイヌ民族が育み、継承してきた文化遺産の保存、活用の具体的な方法を検討し、さまざまな手法を用いて実際に運用展開させていく必要性でした。

今回のシンポジウムの企画実施は、このプロジェクトに参画してくれた、当センターの岡田真弓研究員が中心となって準備したものです。岡田研究員の開催までの準備に経緯を評したいとおもいます。また彼女をサポートしてくれた研究員、教員スタッフにも深く感謝いたします。

どこの地域においても、歴史文化遺産は、その土地の歴史や伝統、そして景観の一部となり、土地の魅力を引き出し、人々をその土地に引きつける大きな要因となっています。人々は、その場所の持っている、自然や人々の暮らしを取り込んだ景観、そしてそこに息づく文化の雰囲気引き寄せられ、体感し、魅了され、なにかしら精神的に満たされるのだと思います。このような文化遺産は、歴史的に幾重にも折り重なり、重層化し深みをもったものです。そこには考古学的な遺跡や出土遺物に始まり、語り継がれてきた神話や伝承、教訓、生活知識、絵画や文字資料、生活用具や衣服などさまざまな文化要素が含まれています。それらは、互いに深く関連し、結びついており切り離せるものではありません。

しかし一方で、先住民族の歴史文化遺産は、一端、大学や研究機関における研究対象となると、考古学や、人類学、民族学、歴史学、神話学、言語学、薬学、芸術学などさまざまな学問分野に分割され

それぞれを結びつけていた横の糸がしばしば忘れ去られ、つながりの重要性が見失われてしまいます。

プロジェクトを通じて私たちが学んだことは、もう一度、文化遺産が存在する場所、土地に立ち返ることであり、学問の垣根を越えて有機的に結びついたそれぞれの文化要素を全体として見つめ、その魅力を引き出すことでした。

そのような私たちの試行錯誤の中で、見えてきたものが、先住民文化遺産という枠組みであり、その価値や魅力の広く地域社会への公開方法としてのツーリズムという手法でした。今回のシンポジウムのタイトルには、そのような私たちの試行錯誤の結果と今後展開させていく方向性が含まれています。プロジェクトを通じて私たちが学んだことは、もう一度、文化遺産が存在する場所、土地に立ち返ることであり、学問の垣根を越えて有機的に結びついたそれぞれの文化要素を全体として見つめ、その魅力を引き出すことでした。

そのような私たちの試行錯誤の中で、見えてきたものが、先住民文化遺産という枠組みであり、その価値や魅力の広く地域社会への公開方法としてのツーリズムという手法でした。今回のシンポジウムのタイトルには、そのような私たちの試行錯誤の結果と今後展開させていく方向性が含まれています。

大学や研究機関に身を置く研究者やそのコミュニティにおいても、研究が研究者の独りよがりな展開では、本来の意味を見失うことが指摘、理解されるようになっていきます。また研究と社会、研究者と市民との垣根を越えて、知識の共有を図ることが求められる時代となってきています。

今回のシンポジウムでは、歴史文化遺産を研究対象としてきた考古学の領域における二つの新たな潮流を、お二人の先生のご助力を得て基調講演としてご紹介したいとおもいます。考古学的な遺産は、あらゆる場所に存在し、大地の中に埋まっております。なぜそのように至る所にあるのか、という理由は、考古学資料がかつてこの大地に生きた祖先の活動の痕跡だからです。人の生活するところには至る所に過去の遺産が残されているのであり、私たちはおしなべて、意識するにせよ意識しないにせよ、そのような過去の遺産の上に存在し、過去の遺産を継承しているのです。

しかし、このような考古学的な遺産が市民の手の届くところにあったのか、その研究の成果が十分の歴史文化遺産の存在する場所や地域に還元され、その価値が共有されていたのかというと、疑問が残ります。先住民族が祖先から文化遺産を引き継いできた土地では、先住民族の世界観や価値観と研究者の理論や手法の擦り合わせや、研究者側から地域社会への説明がなされていたのかというと、これについても十分とは言えません。研究者と地域社会、研究者と先住民族の間には、残念ながら共有されるべきものが共有されてこなかったという、解決すべき課題が存在するのです。

* * * * *

今回のシンポジウムでは、そのような現状をすこしでも打開し、前進させるために、英国とアメリカにおいて注目すべき二つのアプローチを実践されているお二人の先生を講師としてお迎えし、シンポジウム第一日目の基調講演として講演いただきます。

一つは「パブリック考古学」という手法であり、研究を研究者サイドに軸足を置いたものから、市民、地域社会に軸足を置いたものへとシフトさせること、子供をふくめた地域社会での教育を通じた歴史文化遺産の保存と活用の方策をさぐる取り組みです。もう一つは北米やオセアニアにおいて活発な「先住民考古学」の取り組みです。伝統的な考古学は西欧の価値観に基盤を置いて世界中の歴史文化遺産を研究し、評価、解釈してきました。しかし、人々の世界観や価値観は多様であり、過去についての解釈も一つではありません。従来の研究において先住民族からの視点、過去の解釈が研究者に十分に理解されてこなかった点、研究の過程において先住民族が自らの祖先の残した遺産の調査研究に参画できなかった点、研究の成果が歴史文化遺産の後継者社会である先住民族側に十分に説明されていない点を反省し、先住民族の立場から考古学的調査研究を進めようという取り組みです。このような海外の取り組みに学びながら、これからの北海道における歴史文化遺産の保存活用の有るべき姿を一緒に考えてみたいと思います。

もうひとつ、シンポジウム第一日目のプログラムとして準備したものが、アイヌ民族のストーリー・テリングというスタイルをとった歴史文化遺産の保存活用の方法です。文化遺産の表現方法、活用方法はこれが正しく、これは正しくないと規定できるものではありません。一見科学的な調査研究方法にも、研究者の主観が入り込みますし、研究者の眼に入らない、認識できない大切な文化要素も存在します。蓄積された文化遺産の保存活用とは、将来の世代への遺産の継承です。立派な本やガラスケースの中におかれたもの、国の文化財に登録されたものだけが継承されるべき遺産なのではありません。

私たちは文化遺産の保存と活用の手法の一つとして、ツーリズムの活用の方法を模索しているところです。このような取り組みも新たな試みではありますが、さらに多様な文化遺産の保存活用にかかわる表現方法、蓄積された知識や情報の発信方法を検討したいと考えています。そのような意味において先住民族が祖先の知恵や知識の社会学習の手段として伝統的に保持してきた語りの手法をストーリー・テリングから学びたいと考えています。

第二日は、具体的な実践例の報告が中心となります。その前段階として初日である第一日は、ストーリー・テリングを含めた三つの基調講演をいただき、そのあとで、報告者を交えての意見交換を行う予定です。北海道に残されている先住民族の歴史文化遺産の魅力と多様性、そしてその保存と活用が北海道という大地の魅力を高め、そこに生きるすべての人々が誇りをもって次世代へ継承していけるものへと発展させるための方策を提示できればと考えております。

北大のキャンパスは、やっと秋の訪れが感じられるようになりました。かつて秋にはサケが遡上し、森の恵みに感謝する場であったこのキャンパスにおいて一緒に次の世代へ引き継ぐべき先住民族の歴史文化遺産とはどのようなものであるか、いかにしてそれを継承し、将来に活用していくのかこの二日間で議論できれば幸いです。